

研究報告

## 高校生のデートDV研究の現状と予防教育の検討

河田 志帆\*・西井 崇之\*\*・畑下 博世\*\*\*

### 要旨

【目的】 高校生を対象としたデートDV研究について、その実態や防止に向けた教育の観点から国内の文献検討を行い、現状と課題を明らかにし、今後の支援について検討する。

【方法】 医学中央雑誌Web版およびCiNii Researchを用いて、2001～2022年の期間の「Dating DV」or「デートDV」or「Intimate partner violence」and「高校生」をキーワードに原著論文として検索し、17件文献を対象とした。

【結果】 デートDVの認知は進んでいたが、被害・加害経験は男女ともにあり、精神的な暴力が多かった。予防教育は異性間恋愛を前提として当事者意識を高める工夫がされており、デートDVの認知や知識の向上が見られた。しかし、アサーションスキルなど技術については、長期的な効果がみられなかった。

【結論】 高校生のデートDVの実態として認知は進んでいるものの、男女ともに精神的暴力の被害・加害経験が多かった。教育は、異性間恋愛を前提としており、認知や知識の向上は見られたが意識や行動の変容に至らなかった。今後、性的マイノリティの生徒への配慮とともに地域の関係機関と連携し、ジェンダー意識や人間関係形成など背景要因への介入や行動変容に向けた継続的な教育方法の検討が必要である。

Key words：デートDV、高校生、予防教育

### I. 序論

Domestic Violence（以下、DV）は、配偶者や恋人などの親密な関係にある、または関係にあった者から振るわれる暴力とされ、身体的な暴力、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要がある。我が国では、2001年に「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律」が施行されて以降、被害者や加害者に対する支援が進められてきている（内閣府男女共同参画局，2001）。しかし、

2020年のDVの相談件数は、18万件を超え、2019年と比較し1.5倍に増加している（男女共同参画局，2021）。DV件数の増加は世界でも同様の傾向にあり、特に新型コロナウイルス感染症の拡大防止のためのロックダウンの影響が指摘されている（Piquero et al., 2021）。DVは家庭内などの閉鎖的な空間で発生し、その背景には世代間連鎖や、恋人時代からの暴力傾向（Hatashita et al., 2006）が報告されており、親密な関係を築く過程で支配・被支配関係などの不平等な人間関係が形成されてしまうことが原因の1つだと考えられている。

特に、配偶者ではない男女間における暴力のことをデートDVという。我が国の調査では、交

\* 京都看護大学大学院地域生活支援探究領域保健師コース

\*\* 東京医療保健大学和歌山看護学部

\*\*\* 東京医療保健大学和歌山看護学研究科

際相手から暴力被害を受けた女性は16.7%、男性は8.1%と報告されており（内閣府男女共同参画局，2021）、デートDVは女性だけの問題ではない。デートDVに関する先行研究では、大学生を対象としたものが多く、「性暴力」「身体的暴力」に比べて「支配・服従」の認識が低い（松永ら，2019）ことや、2008年と2014年の比較調査ではデートDVの認知に有意な差はなく、実態が改善されていないとの指摘（Ohnishi et al., 2020）がある。つまり、デートDVを防止するためには、大学生になる前の成長発達段階で、認知の向上と対等な人間関係の構築を支援することが重要である。

2020（令和2）年より、学校教育において性犯罪・性暴力対策強化の方針が示され（文部科学省，2020）、「命の安全教育」が始まっている。しかし、デートDVの予防教育には、社会文化背景に基づいたジェンダー規範等への介入の必要性（Miller et al., 2018）が報告されており、文化や教育の背景を踏まえたものが必要である。そこで、交友関係が拡大し身近な人から暴力などを受ける被害を受けやすい高校生に焦点を当て、デートDVの実態や教育についての研究を概観し、予防教育について検討することでこれらの施策を有効に運用することの一助になると考えた。

## II. 研究目的

高校生を対象としたデートDV研究について、その実態や防止に向けた教育の観点から国内の文献検討を行い、現状と課題を明らかにし、今後の支援について検討する。

## III. 研究方法

### 1. 対象文献の選定

医学中央雑誌Web版を用いて、「DV防止法」が施行された2001年以降を検索期間とし、2001～2022年の国内文献を検索した。検索キーワードは、「Dating DV」or「デートDV」or「Intimate

partner violence」and「高校生」とした。原著論文で検索した結果26件が抽出された。次に、デートDV研究は心理学や社会学、教育学などの分野でも進められているため、CiNii Researchにおいても同様の期間とキーワードで検索を行い、17件が抽出された。医学中央雑誌の26件とCiNiiの3件から抽出された29件の文献を、本研究の目的であるデートDVの実態、DV防止に向けた教育に照らし合わせて検討し、最終的に17件の文献を分析対象とした。

### 2. 分析方法

対象文献の研究テーマ・研究目的・方法・結果からデートDVの実態とデートDV防止に向けた教育に分類し分析した。

## IV. 結果

### 1. 文献の概要

分析対象となった文献は2009年以降に発表されたもので、発表分野としては、看護学7件、心理学および教育学9件、人文社会学1件であった。（表1、表1－2）

### 2. 高校生のデートDVの実態

全ての研究で無記名式の質問紙調査で実態を把握しており、学年を限定した調査（中島ら，2010；武田ら，2012；須賀，2016）と高校生全体に行った調査（鈴木ら，2009；山田ら，2010；小澤ら，2013；千葉ら，2020；松並，2020；富岡ら，2020；田中，2021；寒水ら，2022）があった。そして、研究対象施設は各都道府県内の一部の高等学校やデートDV防止教育を行った学校に限られたもので、全国調査はみられなかった。また、デートDVについての内容や被害・加害経験等を尋ねる項目は、文献により異なっていた。

デートDVの知識については、高校1年生の男子の46.0%、女子の21.3%が「知らない」（武田ら，2012）、「DVという言葉を知っているか」につい

て、男子の94.8%、女子の96.6%が「あてはまる」「少しあてはまる」とし、「DVとはどういうものなのか知っている」では、男女の89.0%が「あてはまる」「少しあてはまる」(須賀, 2016)と回答していた。また、中島ら(2010)の調査では、93%の生徒が「DVを以前から知っているか」について知っているとしたが、「デートDVという言葉」を知っている生徒は25%であった。

DVの理解については70%の生徒が「DVが相手とのケンカが原因でおこる」、90%が「女性から男性への暴力はDVではない」としており、80%以上が「DV被害は身近で誰にでも起こりうる事である」と回答していた(須賀, 2016)。DVの認識については、「避妊しない」「メールや着信をチェックする」など10項目について「暴力に当たると思わない」と回答した者の割合は、各項目で3~20%であり、男女別にみると男子の方が「殴ったりけったりする」「避妊に協力しない」「無理やり性的な行為をする」が暴力に当たらないと考える割合が高かった(武田ら, 2012)。また、「腹を立てたとき、相手の腕や肩をつかんだり、押したり、たたいたりする」などの暴力行為がDVと認識されやすい(田中, 2021)ことが報告されていた。

被害経験としては、女子高校生の33.4%、男子高校生の29.8%(山田ら, 2010)、中島ら(2010)の報告では、暴力の種類により30~60%の幅があった。また、武田ら(2012)は、男女交際の経験があるもののうち身体的・精神的・社会的・性的被害経験が1項目でも「よくある」「時々ある」と回答した者は全体の31.1%としていた。寒水ら(2022)が行った2013~2018年の被害認識の経年比較では、男子約4~8%、女子約9~12%とともに大きな変化はなかった。そして、経験がある暴力として最も多いのは「異性と一緒にいたり話したりすると嫉妬する」(小澤ら, 2013)であった。また、SNSでの暴力被害は29.4%が経験していた(千葉ら, 2020)。SNSでの被害経験として、女子の被害経験率が高い項目は「バカにされたり、傷つくようなことをいわれた」や「メールを勝手に

にチェックされたり、他の友人との付き合いをとがめられた」(山田ら, 2010; 千葉ら, 2020)、「返信が遅いと怒られる」(千葉ら, 2020)が報告されていた。そして、被害経験がある生徒のうち、誰かに相談したのは21.2%で女子学生が有意に高く、相談相手としては友人が最も多かった(中島ら, 2010; 山田ら, 2010)。

加害経験について、武田ら(2012)は交際経験がある高校生のうち身体的・精神的・社会的・性的被害経験が1項目でも「よくある」「時々ある」と回答した者は全体の32.4%、山田ら(2010)は女子の42.0%、男子52.1%が「加害経験あり」としていた。加害内容としては、「精神的暴力」の経験が男子の21.9%、女子の25.7%(武田ら, 2012)で最も多く、山田ら(2010)では、「バカにしたり、傷つくようなことを言った」が男女ともに最も多かった。また、小澤ら(2013)の報告では、被害経験と同様に「異性と一緒にいたり話したりすると嫉妬する」が41.0%で最も高い割合であった。

デートDVに関連する要因として、アイデンティティが低い、親の養育態度から情愛や共感を得られず自分をコントロールされたと捉えている者を挙げており、他者との対等な関係が築きにくい傾向があった(鈴木ら, 2009)。また、現代の若者に多いとされる「恋人とは一心同体で、自分のものだから好きなように支配していい」といった依存的恋愛観が強まると男女ともに恋人への暴力行為を「暴力」と認知しない傾向があった(松波, 2020)。そして、富岡ら(2020)は自分の日常生活の様子や写真を公開すること、SNSで知り合った人と直接会うことなどについての意識が高い生徒は、DVに関する意識や性に関する規範意識が高いことを報告していた。

表 1-1 高校生のデートDVの実態に関する文献の概要

論文タイトル (著者、発表年)	研究目的	研究方法	結果の概要
高校生の対人関係形成に影響する要因の検討 - デートDVの潜在性との関連 - (鈴木ら, 2009)	高校生が他者との程度対等な関係を育むことが出来ているかを検証し、関係形成に影響する要因を明らかにする	対象：1～3年生 680名 方法：質問紙調査	アイデンティティが低い、または親の養育態度から情愛や共感を得られず自分をコントロールされたと捉えている者は他者（異性）との対等な関係が築きにくい傾向が認められた。
高校生のデートDVに対する認識と被害・加害状況 (中島ら, 2010)	高校生が持つ、デートDVに対する認識と被害・加害状況を把握する	対象：100名 (学年記載なし) 方法：質問紙調査	93%がDVを知っていたがデートDVという言葉を知っている者は25%であった。行為別の暴力の認識は身体的暴力が最も多く、被害・加害状況としては男女ともにあった。
高校生の Dating violence の特性と課題 (山田ら, 2010)	高校生のデートDVの特性と課題を明らかにする	対象：3,054名 (学年記載なし) 方法：質問紙調査	加害経験は女子の42.0%、男子の52.1%にみられ、男女ともに「バカにしたり傷つくようなことをいった」が最も多かった。被害経験は女子の33.4%、男子の29.8%にみられた。
高校生のデートDVに対する認識および経験の実態 (武田ら, 2012)	高校生のデートDVに関する意識や被害・加害体験の実態を明らかにする	対象：1年生 887名 方法：質問紙調査	デートDVの知識は、男子は女子と比べて「知らない」と回答した者の割合が多かった。また、交際の男女間の暴力10項目の各々に対し3～20%が「暴力に当たると思わない」とし、被害体験は全体の31.1%、加害体験は32.4%であった。
思春期・青年期におけるデートDVに関する意識と実態調査 (小澤ら, 2013)	中学生・高校生・大学生のデートDVに関する認知度・意識・関心および実態を明らかにする	対象：中学生 613名 高校生 618名 大学生 712名 方法：質問紙調査	デートDVへの関心は年齢が高くなるほど高かった。高校生の被害・加害経験が最も多いのは、異性と一緒にいたり、話したりすると嫉妬するであった。
理系高校生のDV、デートDVについての知識 (須賀, 2016)	理系コースに所属する高校生のDV、デートDVに関する知識の実態を明らかにする	対象：理系コース所属の2年生 202名 方法：質問紙調査	DVの知識は、男女差なくほとんど生徒が知っていた。また、DVの特徴に関する理解についての項目では80%以上が「DV被害は誰にでも起こりうる」として認めているものがあつたが、認識できていない項目があつた。



表 1-2 高校生のデート DV の実態に関する文献の概要

論文タイトル (著者, 発表年)	研究目的	研究方法	結果の概要
高校生における依存的恋愛観の心理的要因およびデート DV 暴力観との関連 (松波, 2020)	高校生のデート DV リスク要因を検討を目的に、心理要因が依存的恋愛観に与える影響を明らかにする	対象: 1,250 名 (学年記載なし) 方法: 質問紙調査	男女ともに依存的恋愛観が高まると暴力行為を暴力と認知しない傾向が示された。女性はい、低い本来感が仲間集団への依存に影響し、恋人への依存性にも関連している傾向があった。
高校生の SNS 利用に関する規範意識と性的規範意識との関連 (富岡ら, 2020)	高校生の規範意識と SNS 利用の現状を知り、SNS 利用と性的規範に関する意識を明らかにする	対象: 1、2 年生 3,499 名 方法: 質問紙調査	SNS の利用に関する意識と DV 傾向、性行動に関する規範意識に関連が認められた。交際相手の携帯電話や行動の制限については、2〜3 割の学生に規範意識が低いことが推察された。
高校生における SNS の中でのデート DV (千葉ら, 2020)	高校生の SNS 内でのトラブルやデート DV の実態について明らかにする	対象: 高校生 1,409 名 方法: 質問紙調査	SNS 内でのデート DV は、29.4%が経験しており、「やり取りの内容を勝手にみられる」などがあった。被害経験の割合は携帯電話依存群、普段の生活が「さみしい」群が高率であった。
デート DV のイメージに関する研究 - 中高生を対象として - (田中, 2021)	中高生がデート DV と認識されている行為について、どの程度該当すると認識しているかを明らかにする	対象: 中学生 715 名 高校生 1,725 名 方法: 質問紙調査	暴力行為や自己中心的行為は暴力行為として認識されやすく、束縛行為は高校生の男子で暴力行為との認識が低くなっていた。
高校生におけるデート DV 被害・加害の実態の年次推移 (寒水ら, 2022)	2013〜2018 年度に実施した高校生を対象としたデート DV 教育出前講座終了後に行ったアンケート結果を分析し、被害・加害状況の実態を明らかにする	デート DV 予防教育を受けた高校生 14,001 名のうち、「被害・加害」について「ある」と回答した 2,075 件を分析	6 年間の男性の被害認識の割合の推移は約 4〜8%、女性は約 9〜12%、男性の加害認識は約 4〜6%、女性は約 4〜12%で大きな変化はみられなかった。性別にかかわらず加害認識率が低く、「精神的」暴力が最も多かった。

### 3. デートDV予防教育

予防教育についての文献は6件で、そのうち自治体の取り組みとして高校と連携した活動報告が2件、作成したプログラムの実施および評価が4件でうち、1件は性教育プログラムの一環として行われていた。そして、全ての研究で養護教諭や保健主事、教諭等と連携し行われていた。(表2)

研究のデザインとしては、比較群を用いた介入デザインが2件(須賀ら, 2014; 赤澤ら, 2021)で、須賀ら(2014)は、DV教育の受講経験の有無を考慮し学校側に無作為に対象者の抽出を依頼しており、赤澤ら(2021)は比較群に対して時期をずらし、同じプログラムを実施していた。他の研究については、1群の前後比較(田原, 2011; 吉川ら, 2019)、プログラム実施後のみの評価(山田ら, 2012; 中島, 2017)であった。そして、全ての研究でプログラムは授業時間内または授業の一環として実施されていた。実施時間としては、50分(須賀ら, 2014; 赤澤ら, 2021)や50～90分(中島, 2017)、ロングホームルーム(時間は未記載)(山田ら, 2012)、50分を3日間(田原, 2011)であった。

プログラムの内容については、アメリカのDV防止プログラムであるLoveU2を参考に作成されたもの(須賀ら, 2014)や、オーストラリアの性暴力防止プログラムの研修を受け実施したもの(吉川ら, 2019)など、海外のプログラムを基に実施したものがあった。具体的な内容としては、実態や定義、概要を導入として説明(須賀ら, 2014; 中島, 2017; 吉川ら, 2019; 赤澤ら, 2021)している研究が多く、加えて暴力の種類や説明(須賀ら, 2014; 吉川ら, 2019; 赤澤ら, 2021)が実施されていた。特に暴力に関する内容では、性暴力(吉川ら, 2019)に特化したものや、暴力の種類として全般的に説明したもの(須賀ら, 2014; 中島, 2017)、身体的、性的、精神的、経済的、SNSを用いたもの(赤澤ら, 2021)があった。

実施方法としては、全ての研究で講義を行っており、それらに加え、グループワークやディスカッション(山田ら, 2012; 赤澤ら, 2021)や大

学生を含めたグループワーク(田原, 2011; 中島, 2017)、ロールプレイ(山田ら, 2012; 須賀ら, 2014; 中島, 2017)、能動的な参加(吉川ら, 2019)を取り入れていた。そして、デートDVの状況理解を促すことを目的に、多くの研究で事例を用いており(山田ら, 2012; 須賀ら, 2014; 吉川ら, 2019; 赤澤ら, 2021)、赤澤ら(2021)は、恋愛経験がない生徒も興味をもてるように高校生が日常生活で体験しやすい場面を含めていた。また対応スキルとして、葛藤解決スキルの向上(赤澤ら, 2021)や、互いを尊重する会話を考える(須賀ら, 2014)、性的自己決定の向上(田原, 2011)が挙げられていた。加えて、須賀ら(2014)は、身近で起きた場合の対応方法や相談窓口などの紹介を行っていた。

プログラムの評価は、全ての研究で質問紙を用いて行っていた。質問紙の内容には、研究者が先行研究を基に作成したものが多く、知識や理解を問う内容が多かった。加えて、プログラムの目的と関連した効果測定として性的自己決定尺度(田原, 2011)や、青年用アサーション尺度(赤澤ら, 2021)を用いているものもあった。分析方法の多くは、プログラム実施前後の比較であったが、自由記述式の質問紙で評価しており、テキストマイニングを用いて記載された言葉を分析していたものもあった(吉川ら, 2019)。効果としては、受講後にデートDVに対する理解や知識、認知の向上(山田ら, 2012; 須賀ら, 2014; 中島, 2017)が見られた。また、性暴力に焦点をあてた研究(田原, 2011; 吉川, 2019)では、パートナーからの性的欲求への対応がやや上昇(田原, 2011)、自分や相手を大切にする必要性の意識の変化(吉川, 2019)がみられた。しかし、赤澤ら(2021)の研究では、プログラム実施後にアサーションの関係形成は高まるが、フォローアップ調査では有意な効果が見られなかった。同様に須賀ら(2014)の研究では、関係性の問題と威圧的行為に関する得点がプログラム1か月後には、受講前に戻っていた。

表 2 高校生のデートDV教育に関する文献の概要

論文タイトル (著者, 発表年)	研究目的	研究方法	結果の概要
青年期を対象とした性教育プログラムの効果の検討 - 性的自己決定の向上を目指して - (田原, 2011)	デートDV や性的マイノリティの内容を取り入れた性教育を実施し、性的自己決定力の向上を評価する	対象：高校1年生 67名 大学生2年生 30名 方法：前後比較	デートDVに関連する対処行動についての性的自己決定力は、プログラム実施前後で有意な差が見られなかった。プログラムの内容の検討の必要性が示された。
高等学校の性教育にデートDVに関する内容を取り入れた取り組みの報告 (山田ら, 2012)	A高校での2006年～2012年の性教育にデートDVに関する内容を取り入れ、講話後の集計結果を報告する	対象：2006～2012年のA高校1年生 1,600名 方法：受講後の質問紙調査	受講後にデートDVに関する認識が高まった。教員からは、性教育は相手を思いやる気持ちが大切だとわかったなどの評価があった。
高校生へのDV予防に向けての介入研究 (須賀ら, 2014)	中学生に向けて開発したDV予防プログラムを高校生に実施し、短期的な効果と長期的な効果を明らかにする	対象：高校1・2年生 151名 方法：無作為抽出による比較群を用いた前後比較で、介入群のみ1か月後にフォローアップ調査	介入群において実施直後では、関係性の問題、威圧的行為に有意な効果が見られたが、1か月後は低下していた。考え方を変化させていくには、継続的なプログラムの検討の必要性が示された。
高校生のデートDVの予防教育 - アクティブ・ラーニングを組み入れた予防教育から今後の活動を考える - (中島, 2017)	アクティブ・ラーニングを取り入れた講座を実施し、受講生の反応や感想から今後の講座のあり方を検討する	対象：2014年～2016年の性教育講座の受講した高校生 1109名 方法：受講後の質問紙調査	アクティブ・ラーニングを取り入れて、生徒自身が考え他者の考えを聞く時間を設けた。教育の効果として、よかったが79.3%で、生徒自身が真剣に考える機会となっていた。
高校生を対象とした性暴力予防プログラムの効果 - デートDVに関するテキストマイニング分析から - (吉川ら, 2019)	高校生にSAPPSSを取り入れた健康教育を実施し、デートDVに関する意識の変化を明らかにする	対象：高校1年生 120名 方法：前後比較	性教育実施前は、イメーজとして暴力を考えている学生が多かった。実施後は男女間には合意が必要で、自分や相手を大切にすることを必要としたと意識の変化がみられた。
デートDV第1次予防プログラムの開発と効果検証 - 高校生を対象として - (赤澤ら, 2021)	葛藤解決スキルや視点取得の獲得、暴力観の向上を目標とした第1次予防プログラムを開発し、効果を検証する	対象：高校3年生 193名 方法：比較群を用いた前後比較 (直後、5か月)	アサーションスキルは、受講後に高まるが、5か月後には効果が有意ではなかった。また、暴力観の向上については効果があり、5か月後も維持されていた。

## V. 考察

### 1. 高校生のデートDVの実態と予防教育の検討

今回の文献検討の結果から、高校生のデートDVの認知は進んできていると考える。広島県健康福祉局こども家庭課の調査（2022）では、令和3年度のデートDV認知度は前年と比較し上昇しており、生徒が学校教育やマスメディアなどを通じて知る機会が増えていることが背景にあると考えられる。しかし、須賀（2016）報告にもあるように、女性から男性への暴力はDVではないとの理解については、大学生を対象とした研究（藤原ら，2014）からも同様の報告がされている。加えて実態調査においても、デートDVの認知度は女子の方が高い結果が得られており（千葉県健康福祉部児童家庭課，2021；広島県健康福祉局こども家庭課，2022）、デートDVを暴力と認知することには男女差がある。赤澤ら（2021）は、伝統的なジェンダー意識が強いほど、男性は暴力を受けても被害と認識しにくく、女性は暴力を行っていても加害と認識しにくいとしている。つまり、高校生や大学生においても伝統的なジェンダー意識を持っており、それらがデートDVの認識や被害・加害状況に影響している可能性がある。

被害・加害の経験については、調査によって約30～50%の差があったが、男女ともに経験があった。上村（2010）は、親密な関係性においては、愛情を確認しあいながら育む過程で、DVはいつでも起こりうることだとしており、成長発達過程である高校生は、DVだと認識していない可能性が高い。また、調査においても暴力の種類にはデリケートな内容を含んでいるため、実態の把握が難しいと考えられる。また、今回の検討した文献では性別は男女として尋ね、デートDVの場面においても異性間の恋愛関係に重点が置かれていた。文部科学省（2016）は、教職員に向け性的マイノリティの児童生徒への対応指針を示しており、高校生のデートDV予防教育に関してもその

配慮が必要である。

次に暴力の内容としては、メールや着信のチェックや他の誰かといふことに嫉妬するなど束縛行為などで精神的な暴力に該当するものの割合が被害・加害ともに多かった。赤澤ら（2015）は、精神的暴力は周囲の人間からの孤立や自尊心の低下、服従などの影響を指摘しており、監視や行動制限は男女ともに起こりやすい暴力であることを指摘している。そのため、親密な関係性の中で相手を尊重し、対等な人間関係を構築する力を育むことが重要であるといえる。鈴木ら（2009）は対等な人間関係形成には、アイデンティティの形成と親の養育態度が関連しており、家族内で培われる健全なコミュニケーション等が重要であると述べている。DVに関する先行研究では、世代間伝達（清水ら，2007）が報告されており、共依存などの家族の関係性の問題として説明されることが多い。そのため、対等な人間関係の形成には自分と他者を区分する意識的な境界線（バウンダリー）が重要と言われている。小山（2016）は、バウンダリーは自分自身を保護する機能や、自分の存在や領域にあるものを脅かす事柄や存在を適切に拒否することで、適切な距離感を保ちながら円滑で健全な人間関係を維持することに繋がると述べている。つまり、バウンダリーの形成はアイデンティティの形成にも関連していると考えられ、成長発達の時期にこの考え方や価値観を習得することが重要であると考ええる。

以上のことから、今後のDV予防教育には、これまで行われてきた教育内容に加え、性的マイノリティへの配慮やジェンダーの意識などを踏まえ、SNSの使用を含めた精神的な暴力や対等な人間関係の形成への支援が必要である。

### 2. デートDV予防教育の課題

今回の文献検討から、デートDV予防教育に関する研究は、デートDVへの関心が高い地域で、教育機関などと連携をとりながら授業時間内に実施されていた。山田ら（2010）は、教育実施の背



景に青年期の中絶率が高いことを挙げており、中島（2017）は、自治体からの要請によるものであった。これらのことから、地域の関心の高さが教育の実施に影響していることは否めない。石川ら（2016）は、日本の性教育は、この20年以上が停滞しているとしており、教員が性行動を含む内容を教育することへの抵抗感があることを指摘している。そのため、教員がこれらの教育に消極的であることも否定できない。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための休校やロックダウンが、DVの発覚や被害の相談に阻害的に作用する可能性があるとしており、水面下でのDV被害と加害を助長している可能性がある。そのため、生徒が通う学校という生活空間内でのデートDVの啓発や防止教育がもつ役割は大きいと考えられる。下村ら（2021）は、デートDV教育をしている学校の養護教諭の方が、生徒の相談を受ける傾向にあると述べており、身近な学校で相談しやすい環境を整備することは重要である。

これまで行われた教育内容としては、海外のプログラムを基にしたもの（須賀ら，2014；吉川ら，2019）や、課題解決スキルとしてのアサーション（赤澤ら，2021）、研究者が学校の依頼等で検討（中島，2017；山田ら，2010）など様々な内容でのアプローチの試みがなされていた。また多くの研究で、グループワークやロールプレイを取り入れており、実生活に沿った場面の想像、対処方法の習得、当事者意識を高める工夫がなされていた。村井ら（2019）は、デートDVの予防には、DV行為をしないことに加え、気づいてやめること、相談して解決することの内容が必要であると指摘している。今回の結果から、DV行為に気づき、しないもしくは回避するといった部分に焦点を当てた内容が多かった。今後は被害・加害の両方に対して、相談行動を含めた援助希求行動を促進するような内容が求められる。

教育の実施効果としては、全ての文献において知識や認識の向上が認められていた。これは、教育を受けることで自分の状況を客観的に理解する

きっかけとなった結果だと考える。しかし、多くの文献が前後比較の評価であり、短期的な効果を測定したものであった。フォローアップ調査を実施していた赤澤ら（2021）の研究では、5か月後の効果として課題解決スキルの獲得は十分でなかったとし、須賀ら（2014）の研究においても1か月後にDVの威圧的行為などの意識が低下したと報告している。寒水ら（2018）は、中学生や高校生の行動変容につながる効果的なDV予防教育の回数や内容については課題としており、DV予防教育を性教育で行うのかハラスメント予防で行うかなどにより内容構成が異なることを指摘している。つまり、地方自治体や教育機関など関係機関はどのような位置づけでDV予防教育を行うかについて、地域の特性や健康課題、また生徒の特性を踏まえ検討することが必要である。

以上のことから、デートDV防止の教育は地域の関係機関との連携により行うことが重要であり、養護教諭をはじめとした教職員の相談支援対策の構築と、意識や行動の変容に向けた継続的な教育支援の検討が必要である。

## VI. 結論

高校生のデートDVの実態は、調査によって割合に差はあるものの、約30～50%に被害・加害経験があった。また、男女ともに精神的暴力の被害・加害経験が最も多かった。しかし、恋愛関係の過程で起こりうることから、実態の把握が難しい状況にある。

高校生のデートDVの教育については、多くの研究でDVの知識の提供や認識の変化を目的にグループワークなどを取り入れ、当事者意識を高める工夫がされていた。しかし、ジェンダー意識や対等な人間関係形成などDVを引き起こす背景要因に介入することを目的としたものは見られなかった。今後は、性的マイノリティの生徒への配慮も含め、地域の関係機関と連携し、知識の獲得や認知の向上のみならず意識や行動の変容にむけ

た継続的な教育支援が必要である。

### 利益相反

本研究に関する利益相反はない。

### 引用参考文献

- 赤澤 淳子, 竹内 友里. (2015). デートDVにおける暴力の構造について—頻度とダメージの観点から—. 福山大学人間文化学部紀要, 15, 51-72.
- 赤澤 淳子, 井ノ崎 敦子, 上野 淳子他. (2021). デートDVにおける被害観と加害観の差異. 福山大学人間文化学部紀要, 21, 46-56.
- 赤澤 淳子, 井ノ崎 敦子, 上野 淳子他. (2021). デートDV第1次予防プログラムの開発と効果検証—高校生を対象として—. 心理学研究, 92 (4), 248-256.
- 千葉県健康福祉部児童家庭課. (2021). デートDVに関する大学生意識等調査報告書. Retrieved from: <https://www.pref.chiba.lg.jp/jika/dv/shiryou/documents/r2-datedvhoukokusho.pdf>. (閲覧日: 2022年10月22日)
- 千葉智美, 細木 菜々恵, 中塚 幹也. (2020). 高校生におけるSNSの中でのデートDV. 日本性科学会雑誌, 38 (1), 31-42.
- 藤原 美智子, 吉岡 伸一. (2014). 青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する要因について. 米子医学雑誌, 65 (2), 37-48.
- Hatashita H, Brykczynski KA, Anderson ET. (2006). Chieko's story: Giving voice to survivors of wife abuse. *Health care of women International*, 27 (4), 307-323.
- 広島県健康福祉局こども家庭課. (2022). 若年層におけるデートDVに関する意識調査報告書 (高等学校・特別支援学校・高等専門学校). Retrieved from: <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/491604.pdf>. (閲覧日2022年10月22日)

lg.jp/uploaded/attachment/491604.pdf. (閲覧日2022年10月22日)

- 石川 由香里, 土田 陽子, 中澤 知恵. (2016). ジェンダー規範の性行動に及ぼす影響と性教育の課題. 活水論文集健康生活学部編, 59, 19-35.
- 上村 茂仁. (2010). デートDVの実態と支援. 思春期学, 28 (2), 204-208.
- 寒水 章納. (2018). 効果的なデートDV予防教育実施に関する日本語文献レビュー. 看護と口腔医療, 1 (1), 10-17.
- 寒水 章納, 加峯 奈々. (2022). 親密なパートナーからの暴力予防教育プログラムの効果と評価方法に関する文献レビュー. 看護と口腔医療, 5 (1), 1-10.
- 寒水 章納, 森谷 由美子. (2022). 高校生におけるデートDV被害・加害の実態の年次推移. 日本フォレンジック看護学会誌, 8 (2), 35-46.
- 小山 顕. (2016). 相談援助実践者の情緒的・関係的健全性—バウンダリー (自他境界線) の機能と重要性—. 聖和短期大学紀要, 1, 3-16.
- 松永 明莉, 森脇 智秋. (2019). 大学生のデートDVの認識と友人からの相談を受けた時の対応. 徳島文理大学研究紀要, 97, 31-38.
- 松並 知子. (2020). 高校生における依存的恋愛観の心理的要因およびデートDV暴力観との関連—ジェンダー差に注目して—. 日本健康相談活動学会誌, 15 (1), 52-57.
- Miller E, Jones KA, McCauley HL. (2018). Updates on Adolescent Dating and Sexual Violence Prevention and Intervention. *Current Opinion in Pediatrics*, 30 (4), 466-471.
- 文部科学省. (2016). 性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について (教職員向け). Retrieved from: [https://www.mext.go.jp/content/20210215\\_mxt\\_sigakugy\\_1420538\\_00003\\_18.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210215_mxt_sigakugy_1420538_00003_18.pdf). (閲覧日2022年11月2日)

- 文部科学省. (2020). 性犯罪・性暴力対策の強化の方針の決定について (通知).  
Retrieved from: [https://www.mext.go.jp/content/20210406-mxt\\_kyousei02-000014005\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210406-mxt_kyousei02-000014005_1.pdf). (閲覧日2022年11月2日)
- 村井文江, 坂間伊津美, 猿田和美. (2019). 健康問題としての高校生・大学生のデートDVの現状と予防の検討. 常盤看護学研究雑誌, 1, 7-16.
- 内閣府男女共同参画局. (2001). 配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律.  
Retrieved from: [https://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/e-vaw/law/pdf/dvhou.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/law/pdf/dvhou.pdf). (閲覧日2022年10月1日)
- 内閣府男女共同参画局. (2021). 男女間における暴力に関する調査 (概要版). Retrieved from: <https://www.moj.go.jp/content/001347785.pdf>. (閲覧日2022年10月1日)
- 中島亜彩子, 泉川孝子, 脇田満里子. (2010). 高校生のデートDVに対する認識と被害・加害状況. 奈良県母性衛生学会雑誌, 23,12-15.
- 中島節子. (2017). 高校生のデートDVの予防教育—アクティブ・ラーニングを組み入れた予防教育から今後の活動を考える—. 地域総合研究, 18 (1), 127-135.
- Ohnishi M, Shozaki-Ito H, Tanaka-Shibayama T, et al. (2020). Recognition related to intimate partner violence among university students: a comparison study between 2008 and 2014 at one university in a nonmetropolitan area of Japan. 日本健康教育学会誌, 28 (4), 259-268.
- 小澤美咲, 長谷川博亮. (2013). 思春期・青年期におけるデートDVに関する意識と実態調査. 日本精神科看護学術集会誌, 56 (2), 311-315.
- Piquero AR, Jennings WG, Jemison E, et al. (2021). Domestic violence during the COVID-19 pandemic – Evidence from a systematic review and meta-analysis. *Journal of Criminal Justice*, 74, 1-10.
- 下村淳子, 赤澤淳子, 井ノ崎敦子他. (2021). 高等学校におけるデートDV防止教育の現状と課題—養護教諭が対応した被害相談との関連—. 愛知学院大学心身科学部紀要, 17, 27-36.
- 清水新二, 吉原千賀. (2007). ドメスティック・バイオレンスの家族社会学的研究—非対称性仮説と世代間伝達仮説をめぐって—. 家族社会学研究, 18 (2), 92-102.
- 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環. (2014). 高校生へのDV予防に向けての介入研究. 思春期学, 32 (4), 404-412.
- 須賀朋子. (2016). 理系高校生のDV, デートDVについての知識. 日本教育保健学会年報, 23,65-70.
- 鈴木ひとみ, 畑下博世, 川井八重他. (2009). 高校生の対人関係形成に影響する要因の検討: デートDV (Dating Violence) の潜在性との関連—. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 7 (1), 51-56.
- 田原歩美. (2011). 青年期を対象とした性教育プログラムの効果の検討—性的自己決定の向上を目指して—. 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 1-8.
- 武田道子, 大西和子. (2012). 高校生のデートDVに対する認識および経験の実態. 第42回日本看護学会論文集 地域看護, 151-154.
- 田中寛二. (2021). デートDVのイメージに関する研究—中高生を対象として—. 琉球大学人文社会学部紀要人間科学, 41,15-27.
- 富岡美佳, 梅崎みどり. (2020). 高校生のSNS利用に関する意識と性に関する規範意識との関連. 思春期学, 38 (4), 381-386.
- 筒井淳也. (2022). 家族と新型コロナウイルス感染拡大におけるジェンダー問題. 学術の動向, 27 (5), 24-28.
- 山田富士子, 武田和枝, 阿部伸子他. (2012). 高

等学校性教育にデートDVに関する内容を取り入れた取り組みの報告. 日本性科学会雑誌, 30 (1/2), 69-78.

山田典子, 山田真司. (2010). 高校生のDating violenceの特性と課題. 母性衛生, 51 (2), 311-319.

吉川芙雪, 立岡弓子. (2019). 高校生を対象とした性暴力予防プログラムの効果—デートDVに関するテキストマイニング分析から—. 滋賀県母性衛生学雑誌, 19,23-28.